



01 - 公募展「TAP2006 一人前のいたずら ー 仕掛けられた取手」元汚水処理施設での展示風景



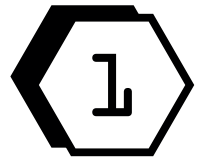
02 - オープンスタジオ「TAP2009 TAP トラベル産直とれたてアート」アトリエ風景



03 - 「サンセルフホテル」ゲストとホテルマンで太陽の光を集める蓄電散歩



04 - 「サンセルフホテル」ゲストが来る日だけ、井野団地の広場に夜の太陽が昇る



## 1. 特別寄稿

# フェスティバルから日常へ

## 移り変わるアートプロジェクトの在り様を捉えて

羽原 康恵

HABARA Yasue

取手アートプロジェクト実施本部  
前事務局長

特定非営利活動法人  
取手アートプロジェクトオフィス  
理事

博士課程芸術学専攻（当時）  
平成18年度修士号取得

国内では1990年代にはじまり、2010年代には日本各地に広がった地域型アートプロジェクト。事業規模、運営主体、実施目的は地域により様々だが、「アートプロジェクト」と聞いて読者はどのようなものを思い浮かべるだろうか？この20年間で「アート」という言葉が頻繁に各メディアで扱われ、しばしば聞かれるようになったのと同様、47都道府県全てで少なくとも1つ以上は実施されているという状況に至った「アートプロジェクト」も、その広がりから少しは社会に認知されてきているように思われる。この冊子を手にとった方にとってはなおのこと既知の存在だろう。

アートプロジェクトは、実施される土地に紐づく地域性に特化した活動（サイト・スペシフィック）、あるいはある特定のテーマに基づく活動（テーマ・スペシフィック）である。その中身は、特定の地域にアーティストが入り、その土地の文脈や風俗、社会構造といった要素を読み解き作品を発表するものから、アートNPO等が恒常的に拠点を構えその企画運営を通じて地域に関与していくもの、共通のテーマを持って各地とつながり特定のヴィジョンを提示しようとするもの、など様々だ。

具体的なイメージを共有するために、筆者が事務局を務める取手アートプロジェクト（TAP）が、どのようなアートプロジェクトなのか、について見ていこう。TAPは日本各地でアートプロジェクトの取組が徐々に始まった90年代末にスタートした、いまや古参のプロジェクトのひとつである。2015年で16年目となるのだが、運営を担う人々は過去幾度

かのタイミングで入れ替わり、その継続の中でTAPはプロジェクトの在り様そのものも変化させてきた。その経緯を追うと、「アートプロジェクト」の現在地を探ることができる。

TAPが活動の舞台とする取手市は、都心通勤者のベッドタウンとしての機能を果たしてきた典型的な郊外都市だ。都内までJRで約40分の距離にあり11万人弱の人々が暮らす。この街にアートプロジェクトが生まれることになったきっかけは、市内への東京芸術大学キャンパス開設後99年に新設された先端芸術表現科に対する取手市からのパブリックアート設置の打診にあった。屋外展示スペースへの作品制作依頼を市から受けた同科の返答は、ただ作品を置くだけの「モノ」ではなく、形のない「コト」としてのプロジェクト実施の逆提案だった。

この発足から2009年まで、TAPが主要事業としてきたのは、全国から作品プランを募集する「公募展」と、取手在住作家の活動を紹介する「オープンスタジオ」である。公募展は、年ごとに「自転車」「郊外住宅」「川」など取手特有の要素をテーマとして作品プランの募集を行い、選出されたアーティストが作品を制作して、期間中街中にそれらが現れ鑑賞できる野外展覧会である。一方のオープンスタジオは、取手市内及び近隣に暮らす、もしくは制作の拠点を持つアーティストの活動を公開する形のもので、普段何をやっているか訝しいアーティストのアトリエを堂々と訪れ、その人と言葉を交わし表現を知る機会を提供するものだった。この2事業を年に一度、秋の一定期間に隔年交互に開催していたフェス

ティバル型事業の11年間を経て、取手の街には実際に一定数のアーティストが定住し、活動拠点を持つようになり、カフェやギャラリーなど民間運営のアートスポットが点在し始めた。また市内のイベントにアーティストのアイデアを取り入れるケースも多くなってきた。スタートから2009年までのTAPの活動は、「街にいるアーティストの存在」を市民が知って、新たな活動を生み出す土壌を培ったともいえるだろう。

### ――上図01、02

そして2010年度から、TAPは新たな形で「地域への定着」を試みるフェーズに入る。12年間続けてきた前述の事業をいったん辞めて、通年かつ複数年をかけて続く、プロジェクト型アートプロジェクトへとシフトしたのである。そうしてスタートしたのが、2つのコアプログラム《アートのある団地》と《半農半芸》である。お気づきかもしれないが、「団地」も「農」も郊外にあるエレメントである。「団地」はまさに、郊外ができる過程で都心での労働人口に対する住宅を供給するために生み出されたものであるし、「農」は中途半端に都会でも田舎でもない、自然環境が適度に残る郊外に残る営みのひとつである。TAPはこの2つの軸を選び、以降現在まで活動を展開しているのだが、その意図は郊外で行われるアートプロジェクトとしてのアイデンティティ、そして存続の意義を見出すことにもある。

団地での取り組みにおいては、パートナーとなるアーティストが継続的に団地に通り、住民と関係を結びながらプログラムを行なっていくのだが、スタートか

ら数年を経ていくつか特異な風景が立ち上がってきている。そのうちの1つが「サンセルフホテル」だ。このホテルは、年に2回のみこの団地に現れるのだが、その仕組みが特徴的だ。団地の空き部屋を「ホテル」に見立て、空っぽの状態から、ホテルマンを自認する地域住民らが部屋を設え、アメニティを整え、ルームサービスを考え、当日のもてなしを行う。そして部屋で過ごす電気は宿泊者がホテルマンと共に団地で太陽の光を集めて蓄電し、その電気は夜に団地の空に昇るシンボル「てづくりの太陽」の光にも使われる。宿泊者は公募され、誰を迎え入れるのかはホテルマンが決める。この人をゲストに、と決めた日から、ホテルマンは2か月強をかけて宿泊本番に向けてホテルづくりを行なっていくのである。

### ――上図03、04

このような団地での活動の土台には団地の中にあるコミュニティカフェ「いこいの＋Tappino」があり、プログラムに地域住民が接触するためのプラットフォームとして機能している。そしてその場とプログラムの運営を巡っては、地域住民はもちろん自治会や民生委員、URや市の担当課ほか、様々な主体が共創関係にある。団地に太陽の光で泊まるホテルをつくる、という突拍子もないが遊び心躍るプラン、アーティストが団地という特定の地域を舞台として提示する「表現の種」に、感性を通じて呼応する人びとが集まり活動がつくられていく。その過程で、実際のコミュニティやそこに暮らす人びとの意識が意識無意識に関わらず上書きされて、新たな様態を見せていく。まさに、日常の中のひと

つの要素として、時間軸を持ったアートプロジェクトが編み込まれることで、日常そのものが変容していく可能性を示唆する。

以上は取手で起こっている現象のひとつであり、現在までのアートプロジェクトの変容を示す1つの事例として捉えてもらえればと思うが、アートプロジェクトはその性質上、刻一刻形を変え更新されていく社会的文脈に対峙し、抗えず常にアップデートされていかざるを得ない。取手アートプロジェクトの変遷の中には、郊外都市を巡る状況や価値観の変化との運動が見て取れる。急激な人口流入から起こる郊外の成立と地縁の分断、地域のアイデンティティを求める市民の欲求、少子高齢化、人口減少と街の将来への閉塞感、その一方で、取手を出て他所で生活する20代30代の故郷として機能しつつある場所でもあること。

そのような首都圏近郊の郊外にある地域型アートプロジェクトが提示できる社会的価値とは何だろうか。それはおそらく、均質な郊外と言われて久しい「郊外」の認識を、アートプロジェクトを通じて書き換えていくことにある。日常の中で自身の感性を生かして暮らせること、それが自らの在り様を決めるための大事な価値であることを、表現を通じて立ち上がる現象を提示して眼前に見せること。それにアートプロジェクトは遊び心を持って挑んでいけるのである。

